

〔平成 27 年度 博士学位論文要旨〕

韓国開化期における日本語教育に関する研究

言語教育研究科 日本語教育学専攻 博士後期課程 黄 雲

(論文要旨)

本論の構成は以下のとおりである。

- 第 1 章 序論
- 第 2 章 韓国における日本語教育の概観
- 第 3 章 「日語学堂」の設立について
- 第 4 章 「日語学堂」の初代教官－岡倉由三郎
- 第 5 章 韓国開化期の日本語学習書の概観
- 第 6 章 韓国開化期の日本語学習書の内容的特徴
- 第 7 章 結論

本研究では、近代韓国における日本語教育の始まりという点に焦点をあて、日本語教育機関と日本語教師及び日本語学習書について、先行研究で明らかにされなかった事項を中心に、一次資料の分析に基づき考察した。

第 2 章では、韓国における日本語教育史に関する先行研究を検討し、時代別の日本語教育の流れについて概観した。韓国における日本語教育は、1414 年、朝鮮中央政府の司訳院において外交事務に必要な通訳、翻訳の仕事と訳官の養成を目的として始まったとされており、近代の開化期に入ってから、官公立学校と私立学校のほかに「日語学堂」(1891 年設立)を始めとする開化期独特の学校形態である「日語学校」が日本語教育を担当していたことを記した。

第 3 章では、近代韓国における最初の日本語教育機関である「日語学堂」の設立時期と設立地域について、従来の研究において未調査であったソウル大学奎章閣韓国学研究所蔵の『統理交渉通商事務衙門日記』、『統椽日記』、『仁川港関草』、『日本語学校教師雇傭契約書』等の一次資料に基づき考察した。その考察から、「日語学堂」が西暦「1891 年 7 月 25 日」に「漢城府南部薰陶坊鑄字洞契鑄字洞」に設立されたことを主張した。

第 4 章では、「日語学堂」の初代教官、即ち近代韓国における最初の日本語教育者である岡倉由三郎の日本語教授法ならびに、彼の朝鮮語研究と日本語教育との関連性を明らかにすることを試みた。その考察から、岡倉が朝鮮での日本語教授において、伝統的な文法

訳読法に対して新しく起こったオレンドルフ教授法を明確に認識・実践したことを検証した。また、教師が学習者の母語を十分に理解していることが前提となるオレンドルフ教授法を用いたのは、岡倉の韓国語に対する深い理解、およびハングルに対する高い評価によるものであり、韓国語また岡倉に韓国語を教授したチェンバレンとの出会いが、日本語教育者としての岡倉を生み出した要因であったことを論じた。

第5章では、開化期における日本語学習書について、従来の研究では全体像が把握されておらず、部分的・個別的に分析がなされてきた開化期日本人著の日本語学習書7種を時代順に概観し、文献学的検討を行い、日本人による日本語学習書の全体像を把握するとともに、開化期前期における日本語学習書の発行状況を明らかにした。

第6章では、開化期日本人による日本語学習書の内容的特徴について考察し、開化期における日本語学習書は、商業活動、即ち生計のため独学用の実用書である日本語学習書を求めていた読者と、営利的利益を求めていた著者の目的が相まって生まれた商業出版物であったことを論じた。

韓国開化期における日本語教育については、韓国植民地化の過程として考えられる傾向が多かったが、本研究の考察から見ると、韓国開化期で行われた日本語教育は、教育時期と教育主体、また韓国人の韓国語に対する態度などによりその目的が異なっており、近世言語教育の影響も見られるなど、複雑な様相であることが分かった。

近代韓国の日本語教育機関における日本語教育は、官立主導によって首都圏からスタートしており、岡倉由三郎といった日本人が初代教官を務めるなど日本側の働きが多かったが、その学習については韓国人の選択によるものであった。

一方で、韓国開化期の日本語学習書による日本語教育は、日本人により作成され、韓国人によって学習されたという点では「日語学校」の性格と同様であるが、その成立においては民間人の主導により、開港地から始まっていることが注目される。

開化期の日本語学習書の著者についての調査からは、中野許多郎、金島苔水が通詞出身であること、弓場重栄と島井浩が日本対馬の朝鮮通詞養成機関を嚆矢とする釜山朝鮮語学所で朝鮮語を学んでいたことが確認できた。また、弓場重栄、金島苔水・広野韓山、島井浩は韓国語学習書に携わった経験を活かして日本語学習書を発行したことが分かった。当時の韓国における日本語教育と日本における韓国語教育の深い関連が窺えるところであり、日本語教育と韓国語教育の連関性は、近代韓国における最初の日本語教師である岡倉由三郎の日本語教育においても見られる特徴である。

以上の考察から韓国近代における日本語教育の始まりは、近代に生まれた帝国主義の「支配のための教育」ではなく、まずは近世からあった両国の言語教育の延長線上にあるものと見るのが妥当であると考えられる。また、開港・近代化といった時代的背景から考えても、当時の日本語教育は実利的目的により必然的に生まれたと見られる。

韓国開化期における日本語教育については、韓国植民地化の過程として考えられ、外国語教育としての評価はあまり行なわれていなかった。しかし、近代韓国で行われた日本語

教育をはじめとする諸外国語教育に関する研究は、近代韓国を理解する重要な端緒となるだけに、より多角的な観点からの考察が必要であると考えられる。